

I. 創立30周年に寄せて

創立三十周年を迎えて

立教大学名誉教授 井上 宗雄

国文学研究資料館（以下、国文研と略す）が開設されて三十周年を迎えるという。月並な感慨だが、誠に夢のようである。主として利用者の立場から館のあり方を見守って来た者として感想を述べる、ということになると、まず思い浮かぶのは、昭和五十七年に出された『十年の歩み』の中の座談会「十年をふりかえって」である。

この座談会には、現職、旧館員および第三者的な立場の人々が、十年を迎えてのさまざまな課題を自由に語っており、私もそのメンバーの一人として参加し、若氣(?)の至りで臆面もなく恥しい発言をしたものである。ただ、多くの方々から貴重な提言がなされ、今見ても国文研の現在と将来とに関わる問題点が既に数々提出されている。この記事を反芻しつつ回顧と展望を述べるのも一方法ではないか、とあって、以下、こま切れになりがちな点については御容赦を願いつつ記すことにする。

昭和四十年代前半の数期間は、多くの先賢の情熱と、二十余の学会所属の研究者と、いふならば民間の総意を挙げて、文字通り手弁当で、充実した協議を重ね、官庁への陳情を行い、国文研設立へと邁進した時期であった。この国文学界ごぞつて高揚した準備期間は、国文研の原点として大切に記憶にとどめたいと思う。

国文研開設以来、全国各地の資料が逐次調査され、撮影され、マイクロ化・紙焼化され、公開され、また研究文献も、館の持つ意義が周知されるにつれて豊かになって行き、このようにして国文研はすぐれた図書館的機能を備えた研究センターとしての評価を高めて来た、とあってよいであろう。この点について一例を挙げていえば、研究者や院生・学生が、論文を書き、学会発表を行い、また演習の準備などをするに当たって、研究史を調べたり、テキストの整備を行ったりする場合、国文研の閲覧室は現に宝庫ともいえる所になっているのである。

しかしこのような宝庫となったのは、もとより自然になったものではなく、館内外の多くの人々の努力の積み重ねに依ったものであることは申すまでもないであろう。とりわけて全国各地の資料を調査・撮影する時、その地その地の研究者の献身的な助力のあったことは疑いない。これを他方からいえば、館の存在する東京周辺に居住する人々の享受する学問上の便宜は、はかり知れないものがある、ということになる。この点も座談会ほかで既に指摘されている。

次に、小さな感想を書きとめておこう。

国文研は今や国文学に関する情報の大集積地である。現代社会において情報の持つ重要性（或いは恐ろしさ）はいうまでもないであろう。この情報の管理運営は、それを利用する研究者と同じ研究者が当たっていることに、私などはきわめて厚い信頼を置いているのだが、その認識はおそらく国

文学界全体のものであろう、と確信している。

最後にたいへん具体的な提案を一つ。

利用者としては国文研の図書館的性格の恩恵を受けることが、おそらく最も大きいであろう。資料や、雑誌類を含めた研究文献の一層の充実を期待すること、切なるものがある。同時に、その基本的性格を確保しつつ、或はその一環として、ユニークな特色があつてよいのかもしれない。例えば、最近、文献学や古筆研究などの分野で貴重な資料とされている古書肆の目録や美術館・博物館の展覧目録を収集・公開するなどの事業(?)を行つては如何であろうか。私見では個人や一般の図書館では仲々できない大事な仕事だと思っている。更にもその細目を作成して公開に至ればなお有難い(仄聞すると古書肆目録の収集は既に着手されているとも)。

国文研の重要な業務に、国際交流、年鑑の発行、公開講演、大学院教育協力等々のあることは存じており、その充実の望ましいことは勿論である。また近時、日本文化への一般の関心の低さが憂えられているが、この一般の風潮に対して国文学界が拱手してよいとは思われない。とりわけ国文研は「国文学の普及」を『十年のあゆみ』にもうたっていることでもあり、一層積極的な動きが望ましい所であろう。これらをすべて含めて、開かれた研究センターとしての役割を、いよいよ深めて行って欲しい、と切に期待するこの頃である。

国文学研究資料館30周年記念に寄せて

東京大学名誉教授 藤原 鎮男

国文学研究資料館30周年記念誌にお招きを賜り深謝致します。この館が生まれ、人と組織が育ち、コンテンツ整備進捗の状態が30周年が祝われることは感銘であり、これまでの関係者のご苦勞、お骨折りを多とし、心からの祝意と感謝を捧げます。そして、折角の機会なので感想、とくに小生の館との関わりを少し述べさせていただきます。

小生は核磁気共鳴、通称、NMR、の発見を風聞で知り、全く文献無しで装置を自作しました。1951年（昭和26年）頃のことで悪戦苦闘でした。文献無しの辛さを身に沁みて味わいました。1953年渡米し彼我の落差に瞠目し、その後東大に配置転換となった後も、このときのショックで海外見聞の必要を痛感し、全く出張旅費の無い時代に苦勞して出かけました。高校同窓の小山弘志館長にパリで偶然再会したのもこの頃です。1969年頃、北欧の大学院学生が論文の機械検索の出力で勉強しているのを見て感心しました。聞くと、英米協力の試験研究の出力で、貧しい北欧でもこれがあれば大学院教育が果たせると言う。そこで帰国してそれを文部省に報告したら、流石に当局も同じことを考えていて、応援してくれ、文献情報データベース管理システム構築の研究を始めました。当時はこの研究への参加は同好の数名で少なく、順不同でいうと、国井利康、山本猛雄、根岸正光、小沢宏、少し遅れて石塚英弘氏らでした。1970年ころ東大TSIRオンライン化学情報検索システムの試験サービスをはじめることが出来ました。これは、海外を抜いて早い時期のオンライン処理でした。我々はさらに、文献処理のほかに、実験装置からの測定生データをコンピューター処理することも実行しました。当今これは常識ですが、当時は世界の嚆矢で、フランスはこれを非常に高く評価してくれました。

文教当局も世界のこの動向をキャッチし、ご承知のように、研究の全分野にこの種の研究支援態勢の構築を企画し、各種の共同研究施設の建設計画が始まりました。当国文学研究資料館創設もその一環でありましょう。当然、情報処理支援態勢はその中核になるわけであり、市古館長のご要請を受け、石塚氏にこの創設事業への参加をお願いしました。同氏が以来斯学に献身的にお骨折りくださっているのは感謝であります。ともかく、文献処理システム構築もサービスも軌道に乗り、小生は、コンテンツの構築に向いました。

幸い藤原譲氏の協力を得ることが出来、文部省学術用語集の統合集の作成を始めました。当初に15部門、ついで22部門の全用語の一本化です。今で言えばこれは簡単事ですが、当時の大型計算機によるこの作業は大仕事でした。ともかくこれで、英語の1語に対応する複数の日本語用語が一目瞭然となり、2部門以上にわたる5000語を抽出して、海外の英、独、仏、西語の専門家の協力を得て多言語対訳基本科学語彙集が出来ました。ちなみに、近来、この用語集を貶める声をよく聞か

すが、それは大間違いであると思います。全世界のどこに、専門分野の専門家が最小必要な用語を慎重審議して決めた例があるでしょう。わずかに小規模の例がオランダにあると聞くだけです。グローバル、多言語、多分野の検索が普通になった今は、この事実の重みは大きいと思います。

当館20周年に少し先立ったころ、私に当時の小山館長から客員教授へのお誘いがあり、喜んでお受けしました。その時の感想をコンテンツ、システム、ネット（流通）に分けて述べますと、コンテンツでの最大課題は、所有権の所在。これは永代保持の責任を主張する所有者と、文化資産の当代での有効利用を主張する研究者の衝突で、その調整は、館長レベルでもなかなか難題と見受けました。出版と電子化も同根です。システムについては、万葉集、二十一代集のDB化などコンテンツの構築がすでに路線に乗り、課題は、異なるデータベース間の渡り検索システムの実現と、その際に障害になろう用語面の支援策、とくに、同意語、異義語集の作成の必要が浮かびました。渡り検索はすでに直接の担当があり、後者がとくに今後の根本課題と思われました。これは、機械化になじまぬ、たいへんな労力事業であり、しかも、これなくしては国文学資料の機械化が実効を上げ得ない種類のことであります。幸いこれには、当時の新井栄蔵部長、松村雄二助教授らがすでに実際に努力中でしたが、その後どうなったでしょうか。国文学にとって本源的な必要事であると国文学界全体が認識し、協力バックアップしなければ成功しますまい。また当時は、動画技術の時代にありましたが、小生には国文学世界への導入策が浮かびませんでした。それよりも、大型機械から時代は個人計算機活用時代に入り、その具体的な研究例を示すことも客員教授の資務かと思い、幸い、連歌に絶大の蘊蓄をお持ちの立川美彦教授と連歌語彙の解折をし、その基本語彙の抽出を果たし、日本人の情緒の原点にまで言及することが出来ました。これは、連歌語彙の切り出しという国文学特有の技法と、データの統計処理という自然科学畑では普通の手法の合力の結果で、資料館なればこそ出来る仕事と思いました。

さて、創館30年。もっとも憂慮するのは時代が改革と称し、折角30年前に標榜した「科学技術支援による文化施設の構築」がようやく形を整え、これまでにない文化を、果実としてこれから収穫する時期に入ろうというときに、統合その他の管理問題に当事者が忙殺されることへの懸念です。「昭和」が後世に誇り得るこの文化施設がさらに発展するよう、関係各位のご健闘、ご幸運を祈るのみであります。

古典籍総合目録委員として

東京国立博物館客員研究員 柴田 光彦
元跡見学園女子大学教授

戸越の国文学研究資料館はかつての三井文庫と文部省史料館のあったところで、私はその昔、文部省の近世史料取扱講習会に参加したことがある。時移り、昭和四十七年に国文学研究資料館が創設され、三井文庫は移転し、史料館が同館の組織に組み入れられ、市古貞次館長が就任、五十二年には開館式が挙行されて、閲覧が開始され、昔の鄙びた風情が堂々たる門構えとなり近代的建物に変ったのに驚かされた。

爾来、同館は数多くの活動をおこないつつ、ここに三十周年を迎えるという。まことに慶賀に堪えない。迂生にも感想の一文を求められたが、時折の展示の拝観、また一講師として壇上に立たされたことはあるものの、申し訳ないことには、不勉強の私は閲覧者として利用したことがない。資料収集では、西鶴の初刷りの『好色一代男』を落札した時は、さすがと感心した覚えがある。

館との直接のつながりといえば、比較的ながく昭和五十八年以來「古典籍総合目録委員」を拝命している。果たして委員として役立ち得ているかは疑問ではあるが。他の委員会は任期二年、一年で半紘交代が通例のようなが、この委員会は重ねての再任委員が多い。

岩波書店が新しい『国書解題』編纂の事業を開始したのが、昭和十四年で十九年には第一巻の見通しがついたところで、太平洋戦争の本土空襲で印刷所が戦火に見舞われ中絶した。百万枚のカードは疎開して戦禍を免れたが、戦後事業を再開、再検討した結果、昭和三十二年より解題に代えて、新たに国書の総目録を刊行することになり、昭和三十五年までに七十万枚のカードを追加して、全国図書館文庫の総合目録として、『国書総目録』全八冊が、昭和三十八年より五十一年までに刊行された。これまで必要な書物を探すのに、苦労を重ねていたことが一挙に解決される画期的な書目であり、斯界は瞠目して此の書に飛びつき、一冊八千円が目録八冊の古書価が一時は三十万円という高値がつき、驚いたものだった。本目録の国書研究室の代表は森末義彰・市古貞次・堤精二の三氏である。

その後、市古氏は国文学研究資料館の初代館長に就任された。岩波の事業に準拠した方針を引き継ぐ『古典籍総合目録』の作成編纂事業推進のために昭和三十五年度に委員会が結成され、まず東京大学史料編纂所長森末氏の後任である菊地勇次郎氏・堤精二氏、他の若干名は未定、その後国会図書館の乙骨達夫・東京工業大学附属図書館の黒住武・関西大学附属図書館の森川彰氏が加わり、館内委員として整理閲覧部長の本田康雄氏、専門委員会として館内の諸氏が就かれた。まさに機械情報社会に突入の時であり、CP導入によりデータベース作成も機械化されて、市古館長に続く小山弘志館長の時に、昭和六十三年度まで九万一千点のデータを収録した『古典籍総合目録』三冊が平成二年（一九九〇）に刊行された。今後の課題として、IT時代に対応する、印刷目録から

データベースのインターネットによる切り替え公開問題など、種々の案件があるが、独立行政法人改正と前後して諸機関の資料の情報公開が活発に動き出しているので、本委員会も著作権の問題を抱えながらも公開実現への見通しを立てて行く問題が残されている。

先にも記したが、当委員会は開設以来二四年を算えるが、委員は、役職による交代はあっても、留任の人が多い。堤氏は創設以来の委員で、『国書総目録』の責任者としての前歴もあり、名委員長としてその重責を果たしてこられた。小山館長時代、印刷目録の後の新方式には本会は解散して、また構想を新たにした委員会に委ねるという発言があり、昨年で終了の積りであったところ、前回松野陽一現館長はそのまま継続すると発言されたのに驚きながらも、皆承諾したが、翌日、岡雅彦企画調整官から電話があり、堤氏は高齢で辞任され、二番目に古い私に委員長役を割り当てられた。そして氏の代りに本稿を認めることになった次第である。老残、ITの新時代に対応可能か否か、不安に怯えているこの頃である。

思—い—出—すは

城西国際大学人文学部客員教授
ハルトムート・ロータモンド

日本文学を取り上げてから、早々も40年経った。日本宗教文化史を幅広く専攻し、民間信仰を中心に勉強をして来た。絶えずに中世近世日本社会における文学、宗教、言語と云う範囲で勉強してきた。

故に鎌倉時代の説話、沙石集の研究に手をつけ、1979年、注付のフランス語訳を世に出した。唱導の歴史を辿りながら明治の説教をもテーマにした頃、国文学研究資料館からの招へいの恩恵に浴した。七か月間の日本滞在であって、寅さんの故郷の葛飾区から毎日スタートして戸越銀座を通り、資料館に出勤した。以前から小生も出入りしているバリのInstitutdes Hautes Etudes Japonaisesと協定を結んでいた資料館の方々とは、以前より懇意になっていた事もあって、当地でとても暖かい歓迎を受けた。

冷房付の研究室は明るく快適で、暑い日本の夏にも負けず、研究に没頭出来た。机上には基本参考文献も少々揃っていて、日本では通常PC Windowsであるのに、小生の研究室には直ぐにもこちらが慣れているMacintosh等の情報機器を手配して下さった。又、完全にはバリの雑事から逃げられない小生だから、直通利用可Fax/Telは、とても重宝して有難く感じられた。

戸越八幡宮の加護下で、すこしく引っ込んで建てられている資料館は緑のベールに囲まれている。其の中の諸先生達は、蓬莱島の仙人の様に見えるものだった。

自分の仕事の途中で何らかの問題が起こった時は、いつも親身に相談に乗って頂いた。文献資料部長室での午後のコーヒー休憩は、その好都合な機会でもあった。

書庫への直通は研究に如何ほど便利であったか！インターネット等を過度に吹聴されそうな現代であるからこそ、先学の書籍にいつでも自由に手を触れ得るのは大変大事と思った。

又館外で某大学か某図書館で文献を調査する情勢が生じた時、“資料館から”…と名乗れば、宝物庫を開く呪文の様な効果もあった。

長い一日は、じっくり自分の調子で仕事出来る。“思—い—出—すは、あの日のこと、暖かい環境の…”とでも言える、あの七か月！夕方ともなると、不断静けさの一区画であり、一種の“勸学院”でもある資料館は、一段と静寂に包まれる。ふと、“竿屋—青竹”…の声を耳にしたりと、早急に失われてしまった日本古風の声が伝わって来た。五時頃、どこからともなく心染む懐かしい童謡が、夕暮れの帰宅を知らせ、其れに誘われたら、時には他の先生達の何人かに案内されて、近くの小料理兼飲み屋で仕事抜きの、“八珍堆裡”や酒一、二、三徳利傾盡懇談にも恵まれた。“有口難作語/有耳奈不聞/得意唯有舌”（渡邊 昇）——とでも思われたかも知れないが、とても楽しかった。

沙石集や金撰集との比較を通して、説話上の和歌の機能を研究しながら、あっという間に日々が流れ、出勤名簿帳に記入の最後の日が来た。資料館境内を出て、戸越銀座に下る前、もう一度振り返り、遠い昔、買島が歌った“望井州”の感を起こし兼ねなかった。

（朝まだき黄葉の拙宅にて）
露田主水

国文研で蒔いた種

コロンビア大学名誉教授
バーバラ・ルーシュ

まずはじめに、松野陽一館長をはじめ国文研の皆様方に対して創立30周年のお祝いを申し上げます。

私が客員教授として国文研のお世話になったのは、1993年でした。もう9年前のことになりますが、その頃は、佐竹昭廣先生が館長でありました。館長をはじめ国文研の先生方、そしてスタッフの方々のご厚意も忘れられませんが、国文研を囲む自然環境のすばらしさも鮮明に記憶に残っています。季節ごとに見事な色彩の変化を楽しませてくれる木々のなかに池がぽつんとあり、そこへ青鷺が毎年やってきて魚をねらう光景は、ますますコンクリートへの依存度を高める東京の真ん中にあるとはとても思えませんでした。貴重な資料の収集と保存を目的とする国文研としては、この希有の自然の保全にも力を注がれることを切に望みます。

この美しい自然のなかに不思議なほど調和して、一匹の白猫が住んでいました。「白」と「資料」をかけて私は、彼をシリョクンと呼びました。当時、国文研と何らかの関わりのあった方々は、この白猫の姿を覚えておられると思いますが、シリョクンは私には、戸越大明神の別のお姿だったと覚えてなりません。毎朝、国文研に行くと、シリョクンは私を迎えてくれましたが、その姿を見て、ああ、今日も無事に一日が過ごせる、と思ったものでした。

こうした国文研に関する周辺的な思い出は、私にとっては貴重な、懐かしいものばかりですが、国文研は、私の本業のほうでも大きな影響力を与えました。私は長年、とくに中世小説、御伽草子、音声文学、絵解きなどを専門として中世日本文学や文化の研究を続けてきましたが、国文研に招聘された頃、新しい分野に関心を寄せ始めておりました。つまり、中世・近世文学・文化に大きな影響を与えた尼僧たちの存在に興味をもち始め、なんとかして歴史のなかに埋没してしまった彼女たちの姿を復活させたいと考えていたのです。

そのきっかけとなったのは、頂相彫刻の書物を読んでいた時でした。13世紀に無外如大禅尼という尼僧が生きていたことを知り、びっくりしましたが、なにより驚いたのは、もう何十年も日本の歴史や文学や文化について研究してきたのに、このようなすばらしい尼僧が存在したという事実に関心できなかったことです。腹立たしい気持ちになると同時に、その時まで私が行ってきた日本文化史や文学の研究は、どこかおかしいと思うようになりました。この女性と出会って以来、私の学問の道が大きく変わったといえます。

無外如大は、臨濟禅を鎌倉にもたらした中国の禅師、無学祖元の教えを受けたのち、京都に景愛寺を建て、そこの住職となったばかりか、多くの末寺までかかえることになりました。景愛寺は、のちに室町時代を通じて尼寺五山の中心をなすに至ります。ところが、不可解なことに、男性の五

山については外国語でもよく研究されていましたが、尼寺五山については2、3の論文を除いてはほとんど何も書かれていませんでした。国文学者は禅僧の漢詩を高く評価し、五山文学として研究していました。しかし、和漢の学問に深く通じた無外如大でありましたが、禅尼僧であったために、公案関係の和歌を残したにもかかわらず、誰も彼女を国文学の分野で活躍した人物として評価していませんでした。

実際のところ、中世・近世の禅尼僧による、いわゆる「公案和歌」が多数記録されているにもかかわらず、私の知るかぎりでは、誰も研究していませんでした。また、後水尾天皇の時代は、景愛寺関連の尼寺院のルネサンスでした。天皇の、多くの姉妹や皇女たちが京都や奈良の尼寺院の住職となり、いわゆる比丘尼御所が開きました。現在ではこのうちの13寺院しか残っていませんが、古文書、和本、絵巻、その他いろいろな文学作品や美術品が保存されています。しかし、当時、誰もこれらの資料を組織だって研究しようとする人はいませんでした。

国文研で研究を始めた頃、日本全国の社寺の調査研究プロジェクトが行われており、すでに150ものお寺が調査されていたのを知った時、私は大変喜びました。ところが、喜びは、この調査のなかに尼寺院が一件も含まれていないことを知った時、悲しみになりました。そんなわけで私は、当時、客員研究員に課されていた研究プロジェクトに「日本文学における女性と神仏信仰」をテーマとして選び、館内外の研究者に呼びかけました。目的は、尼門跡寺院に対する関心を高めること、そして調査・研究計画の作成でした。このプロジェクトは、その後、複雑な経緯を経て、国文研と私が所長をしております中世日本研究所との、5年間の共同研究プロジェクトへと発展し、現在も名前は変わっておりますが、続けております。

このような調査・研究を行う過程において私は、貴重な資料を保存している尼門跡寺院が誰からも省みられずに、いわば社会から見捨てられた存在となってしまっていることに気づきました。いままでもわれわれ研究者は、調査・研究対象からデータを得ることだけに熱心であり、その行為は完全に一方通行でありましたが、はたしてこんなことだけをしていて良いのだろうかと考えるようになりました。このまま何もしないで放置しておいたら、何十年か後には取り返しのつかないことになっているかもしれない。国文研との共同プロジェクトを終えたのち、この方面で何をすべきか模索していた時、幸いにも平山郁夫氏が理事長の文化財保護振興財団（東京）と世界遺産基金（ニューヨーク）とに出会いました。現在は、現存する尼門跡寺院を次世代の研究者に残す具体的方策について検討を終え、実施に移そうとしております。

2002年、門跡方をはじめ、いろいろな方々の協力を得て中世日本研究所は、これらの具体策を実施に移すために京都に事務所を設けました。実をいいますと、来年、この研究所も35周年を祝い、京都の大聖寺門跡尼寺院の近くに女性仏教文化研究センターを開く予定をしていますが、9年前に国文研で始めたプロジェクトがこのようなかたちに発展していったのを見ると、感慨深いものがあります。今後、尼寺院の調査・研究がどんどん進み、その結果、日本の文学史・文化史が書きなおされる日がくることを楽しみにしておりますが、同時に若い研究者がこの分野に関心を持ち、われわれに遺されたものを次世代に伝えるための努力にも手をお貸し下さることを願ってやみません。

国文学研究資料館創立30周年に寄せて

日本女子大学長 後藤 祥子

国文学研究資料館の創立30周年、おめでとうございます。

この30年という歳月は、ちょうど曲がりなりにも研究の道程の出発点に居た私ども世代にとって、実に大きな意味を持ちました。それは単に、全国津々浦々の得難い資料が、労せずして一望できるという実質的利便に止まらず、自分たちの携わっている世界に公明なシンボルタワーが出来たということでしたから。旧帝大や超大私学ならいざ知らず、弱小私学にとって、オリジナルの写本を買い集めるなどは夢のまた夢ですし、まして研究費の乏しい院生たちにとって、全国の写本をみて歩く旅は、時間的以上に経済負担がなかなか大変なものでした。院生時代に家集や後拾遺であちこちのお世話になった経験からみると、その後、袖中抄で資料館の恩恵に与った時には、さればこそ、とその有り難みを満喫したものでした。もっとも、あまりにも有り難すぎて、これでは若い人たちにとって、実物を見て歩く大切さがつい軽んじられてしまうのではないか、という危惧も浮かばないではありませんでしたが。しかし若い人たちは馬鹿ではないので、見ていると、ひまさえ有れば全国の美術館・博物館の展示にはまめに外かけていくし、古書展も欠かさず覗くといった具合で、実物を見ることの大切さをよく心得ているようです。むしろ、資料館でいっぺんに豊富に資料に接することができるからこそ、その現物を直にみることに敏感になり得ているように思えます。

もう一つの恩恵が研究文献データベースでした。若い頃、個人的必要からも、学会展望の必要からも、文献カードとりに余念の無い時期がありました。ちょうど梅棹忠夫の『知的生産の技術』が出た時分で、(それは『国文学年鑑』のもとになる「文献目録」創刊の時期でもありましたが)、非常勤先で青木正次氏(藤女子大)の強烈な影響下にあった私は、早速カード取りを始めました。文献目録には人名索引はあっても、事項索引は無いわけですから。そのカードケースが六箱になった所で、ぱったりと動きが止まりました。資料館による研究文献データベースの提供が始まったのです。もっともこのサービスは最初の頃、私のような機械音痴には苦勞でした。機械に強い院生がやり方を大きな紙に書いて目の前に張り出してくれ、それを頼りに卒論指導などが緒に着くのでした。いまでは図書館のパソコンコーナーに学生がたむろし、他の情報機関のものと一緒に存分に恩恵に浴しています(いるはずです)。もっともこうした恩恵も、あまり手軽に得られすぎると、自分で作る妙味を知らずじまいになってしまうのではないかと、たとえば吉海直人氏の『源氏物語研究ハンドブック』などを示して、キーワード検索だけでは得られない文献探しの大事さを警告している所です。そういえば吉海氏も、ここ資料館で研究活動を開始された方でした。

さて資料館とのご縁で最も印象深く、また有り難かったのは、平成八～九年にわたり、客員としてお世話になったことでした。ちょうど「原本データベース」シリーズの企画立ち上げの年で、もともと機械に弱い私が、どうした弾みかその出発点にお相伴させていただき、一部始終を拝見でき

たことです。午前中びっしりと研究会。実に中味の濃い集まりでした。坐る所も充分でない部屋に、国文学プロパーの人間も情報関係の方たちも満員でしたから。データベース作りなどという作業は、今後ますます個人レベルで拡がっていくに相違ありません。資料館には、そうした作業を見守り、貴重な人件費を有効に生かすためにも、交通整理的役割の重要性がますます求められていくのではないのでしょうか。

ヨーロッパの図書館に所蔵してある 由緒のある和漢書いくつか

ケンブリッジ大学教授 ピーター・コーニツキー

国文学研究資料館の創立三十周年の際、まずお祝い申し上げたいと思います。資料館の今までの偉業を高く評価しているのは言うまでもありませんが、これからも国文学の分野での指導力を益々発揮するよう期待しています。なお、資料館のお陰で、小生が担当している「欧州所在日本古書総合目録」が資料館のwebsiteに掲載されて世界中の日本学者にアクセスできるようになっていることは、私個人にとっても喜ばしいことで、同時に感謝の意を述べたい次第です。

十年ぐらい前から、及ばずながら「欧州所在日本古書総合目録」関係の調査を続けてきたが、各国の図書館、美術館などの和漢書を調べて、書誌学的に珍しいものは勿論、出所や元の蔵書家の関係で興味深いものもかなりあった。たとえば、ケンブリッジ大学付属図書館のアストン・サトウ文庫に式亭三馬や柳亭種彦の旧蔵書が入っているが、それはもう日本で知られているのではないかと思うので、ここではむしろ、あまり知られていないと思われる二、三の例を紹介してみることにする。

まず、アイルランドの首都ダブリンにあるトリニティー・カレッジ大学の付属図書館のことだが、その和漢書コレクションの中に橋本玉蘭斎の『御開港横浜之全図』（安政6年序刊のはずながらこの場合序文がない）という多色刷り鳥瞰図がある。それは明治元年に相当する1868年10月9日に、日本駐屯英国陸軍第二十連隊のイーガン（Egan）大尉が同カレッジに寄贈したものである。地図の由緒については、眉上に詳しく書いてある。それによると、上記の横浜地図は、元治元年（1864）に暗殺された同連隊のボールドウィン少佐のポケットにあったもので、後でその死体からうけとったというわけである。これは、周知のように、ボールドウィン少佐とバド中尉という二人の士官が鎌倉見物がてら攘夷派の浪人に刺し殺された例の鎌倉事件のことで、少々不気味なものではあるが、この地図が端的に幕末の緊張している事情を反映している。

次ぎは、ドイツのベルリン国立図書館に、松平定信が編集した『集古十種』78冊が所蔵されている。その第一冊目にプロセイン国公使館所属日本語通訳として勤めていた福地源一郎が執筆したオランダ文の書簡が添付されているが、全78冊が、元々プラントというドイツ人のものであった。マックス・フォン・プラントは、幕末にプロイセン国の初代駐日領事として来日、1872年にドイツ全権公使に昇進、1875年まで日本に滞在していた人物であるが、この『集古十種』は1873年開催のウィーン万国博覧会に出品され、後で、同日本博覧会事務局所属のドイツ人ワグナーによってベルリン国立図書館の前身であった王立図書館に寄贈されたい。

最後に、フランス北部にあるリール市立図書館に、フランス人日本学者の先駆者でパリ大学の初代日本学教授になったド・ローニの旧蔵書が所蔵されていることはある程度、知られているようである。周知のように、ド・ローニは福沢諭吉のような渡欧日本人とは交際していたものの、終生日本の土を踏む経験がなかったので、日本の書物は日本から取り寄せるか西洋で求めるしか方法がなかったのである。今リール市立図書館のド・ローニ文庫の中に、ロシア語の書き入れのあるものが二十点ぐらいあり、ド・ローニの入手源の一つを判然としてくれる。その二十点は、実は、マホフというロシア正教の神父が、幕末に函館のロシア領事館に所属している間、蒐集したものである。ちなみに言うが、マホフは、文久元年（1861）に『ロシヤノイロハ』という日本人向けのロシア語単語集もだしているのだから、日本語能力はかなりあったはずである。尚、ド・ローニ旧蔵書の中に、榎本武揚、福沢諭吉、幕末に数回フランスを訪れた山内六三郎などから贈呈されたものも含まれている。

以上のように、幕末の攘夷運動、明治博覧会参加および初期の日本学を垣間見せてくれる書籍を紹介しただけであるが、その外、各国の図書館に同類のものが所蔵してあり、その情報がまだ日本に伝達されていないのは遺憾に思う。

ブックロードのある風景

浙江大学教授 王 勇

二〇〇〇年四月から、日本史専攻のわたくしが国文学研究資料館に客員教授として招かれたのは、ブックロードの縁だったと思っている。中国に流出した和書を現地で調査していた岡雅彦教授が、私どもの中日書籍交流に関する著書に注目してくれたことから、客員招聘の話が始まったらしい。

それはともかくとして、「東西交流はシルクロードを通して行なわれ、東アジアはブックロードによって結ばれる」と、ブックロード論を夢中に提唱している私にとって、和書の調査・収集・研究の諸機能を併せ持つ資料館は魅力的であり、すぐに承諾した。

共同研究 資料館における一年間、客員教授は共同研究を主宰することを義務づけられている。「何をテーマにしたら良いか」と岡教授に相談したあげく、「ブックロード——中日書籍交流のメカニズム——」と決め、以下の趣旨書を関係者たちに送り、共同研究員を募った。

東アジア諸国の文化形成の深層には濃密な精神的交流があり、文明志向・美意識・道徳観・思考様式・風俗習慣・行動規範などにおいて共通的な基盤が存しているとみられているが、そうした精神文明の交流は主に書物を媒介として行なわれ、その結果はまた書物を通じて具現化されると考えられる。そのような、書物を介しての精神文明交流のメカニズムを解き明かすべく設定された概念がブックロードである。本共同研究ではこの概念に基づき、東アジア諸国のうち特に中日間の文化交流の歴史を、書籍の伝播・流布・書写・翻刻・引用・翻案・改作などの具体的様相の検討によって追究することを目的とする。さらに書籍を刺激源とする文学の発生・継承・変容・創造の仕組みを明らかにすることも目標とするものである。(後略)

その後、共同研究の趣旨に賛同するという回答がつつぎと返ってきた。中国哲学の戸川芳郎教授、日中交渉史の大庭脩教授、平安文学の田中隆昭教授、漢文学の後藤昭雄教授、日本史の村井章介教授と新川登亀男教授、江戸文学の徳田武教授、それに在日する中国人の看板学者ともいべき張競教授、王敏教授、銭国紅博士といった豪華な顔ぶれをみると、さすが資料館の方も驚いたようだ。

それぞれに専門の異なった著名な学者たちがブックロードによって結ばれ、ささやかな共同研究を大いに盛りあげてくれた。そして共同研究が終了した六ヶ月後に、論文集『奈良・平安期の日中文化交流——ブックロードの視点から——』が農文協より刊行された。これも資料館のおかげで小さな奇跡を実現させたと言えるのかもしれない。

古書調査の旅 客員教授が所属する文献資料部には、十数人の専任教官が配属されている。三階のコピー室に通じる廊下の両側に、研究室がずらりと並んでいる。そこを通るとき、いつも足音を立てぬようにゆっくり歩く。というのは、かならずといていいほど、ドアを開けっぱなしの研究室があるからだ。

あとで聞いた話だが、文献資料部には教官が入室したら、ドアを開けておく不文律が昔からあったという。そうすると、ドアを閉めている研究室の主はすべてお留守だということになる。それにしては、ときに半数をこえる留守番は多すぎるではないか、最初はそう思っていた。

その理由は、まもなく明らかになった。館内で出会った同僚らに挨拶すると、彼らはたいがい出張から帰ってきたばかりか、これから旅に出ようとしている。原典研究を学問の基盤としている資料館では、教官たちはしばしば各地の公私図書館や神社仏閣などに出かけて、文献調査を精力的に行っていた。そして、貴重な古書をマイクロフィルム等によって収集し、研究者の利用に供している。現在は三十万点ほどの調査を行ない、十八万点あまりの作品を研究者に提供している。世界に類例の少ない機関である。

日本国内の調査とはほぼ平行して、海外に流出した和書の現状調査も手がけられていた。ただし、これらの調査は欧米を中心に行なわれ、ここ数年は韓国や台湾にも手を広げるようになったが、ブックロードの発祥地である中国大陸はまだ手つかずの状態にある。

わたくしの本務校である浙江大学日本文化研究所では、一九八九年から「中日書籍交流史」の共同研究プロジェクトが発足し、日本古書の中国流入も重要な課題の一つとなっている。その成果は『中国館蔵和刻本漢籍書目』や『中国館蔵日人漢文書目』などにまとめて刊行されている。

こうした情報を紹介して、中国での調査をお薦めしたところ、松野陽一館長はこころよく聞き入れてくれた。二〇〇一年の一月と八月の二回にわたって、松野館長率いる代表団は上海図書館、浙江省図書館、浙江大学図書館、寧波天一閣博物館をおとずれ、和刻本を中心に調査したのである。

これらの調査を通して、ブックロードは中国書の輸出を意味するものだけでなく、日本の古書もかなり海外に流出していたことが明らかになった。

詩集『雑抄』 資料館の教官らが海外に流出していた和書のゆくえを懸命に追跡しているのと同じく、わたくしは日本に伝わって中国では失われていた佚存書に目を光らせている。そのなかでも、遣唐使らの持ち帰った書物がどう読まれ、どこに保存されているかは、わたくしの関心事である。

はからずも資料館に在任中、ある大発見にめぐりあった。住吉朋彦氏の紹介によれば、宮内庁書陵部に『雑抄』という唐詩の残巻が所蔵されているようだ。その情報に接するや、すぐに宮内庁書陵部に出かけて原物を調査しようと思った。

松野館長は、私のために書陵部の関係者に連絡を取り、閲覧の当日はご多忙にもかかわらず、自ら書陵部まで同行され、原物を調査するときには有益なアドバイスをしてくれた。手帳を調べると、当日の欄に

書名：雑抄。撰者：不明。形は胡蝶装の冊子本、薄手の黄紙12枚を四つ折にして48面。高さは約28.5cm、幅はおよそ12.7cm。書陵部の検索番号：70165/1（伏2036）。唐人の詩集であること間違いない。大発見か。

と書き込まれている。至福の一時を過ごすことができた。

その後、マイクロフィルムの撮影と複製を依頼し、その貴重さをあらためて思い知らされた。本文の第一面の冒頭には「雑抄巻第十四」と書き、行を改めて「曲下」とあって、以下は20人の34首

の楽府詩と散文1首とを抄録している。そのうち、18首は『全唐詩』などに漏れており、いわゆる「佚詩」に属するもので、大発見と言わねばならない。

書物との出会いは、まさしく禅宗のいう「一期一会」そのものである。上海図書館で調査したころ、日本では国宝の指定をうけるはずの光明皇后の写経と対面したときの感動を、今も鮮明によみがえらせている。

東アジア諸国はかつてブックロードによって結ばれ、文明発展の道とともに歩んできた。海外に流出した日本古書の調査も、日本における中国佚存書の調査も、単なる懐古的な情緒を満たす行為ではなく、書物によって伝わる文明の遺伝子を今の社会に確認する意図が、わたくしにはあるのである。

資料館の原典重視の学術風土は、ブックロードの思索を熟成させてくれる最適な環境であった。原典のもつ個性を一冊一冊と虚心に見つめると、書物はまるで生き物のごとく見えてくる。こうした日々の感動は、わが心に残る美しい風景に凝縮されて、今もありありと脳裏に浮かんでいるのである。

国文学研究資料館と電子化資料

九州大学大学院人文科学研究院教授 今西裕一郎

自分の研究のためにはあまり国文学研究資料館に出かけることのなかった怠惰な私が、多少とも資料館と継続的なかわりを持つようになったのは、京都大学での指導教官であった佐竹昭広先生が館長に就任された平成5年からである。その年、文献資料部の併任助教授を半年間拝命し、その後「国際日本文学研究集会」の委員を平岡委員長のもとで二期つとめた。

また、ちょうどその頃、統計数理研究所の村上征勝教授の研究室で『源氏物語大成』本文のデータベース作成の手伝いをしていた関係からか、コンピューターはほとんど扱えないのに、シンポジウム「コンピューターと国文学」の『源氏物語』を取り上げた会に一二度出席を求められ、「原本テキストデータベース委員会」にも二期、委員として参加した。

その時の最初の仕事が、後に岩波書店から「国文学研究資料館データベース古典コレクション源氏物語〔承応版本〕CD-ROM」として発売されることになる、版本絵入り源氏のデータベース化であった。

これは、私自身の専門にかかわると同時に、発足したばかりの委員会の最初の仕事でもあったので、思い出せばなつかしい。新しい仕事に付きものの試行錯誤もあり、しかもその試行錯誤のひとつは私にも責任があったので、なおさらである。

というのは、その源氏データベースの画像および底本には、当初、九州大学文学部蔵の古活字版を使おうという私の提案が委員会で認められ、データベース室の中村康夫室長と杉田まゆ子非常勤研究員（ともに当時）が九州大学に出張し、事前調査をるところまで進んでいたのであるが、データベースの底本使用許可という前例のない事態に、九州大学附属図書館の事務方が検討に時間を要し、年度内の作業開始が危ぶまれたため、結局、九大蔵古活字版の採用は見送られることになったからである。

この古活字版源氏は、今井源衛先生が昭和46年度に研究費で購入された一本で、川瀬一馬氏の『古活字版之研究』に未載の本である。そのような新資料紹介の意味もこめて、資料館の『源氏物語』画像データベースの底本にと思ったのであった。

当事者が所蔵しない文献の画像データベース化には、複雑な利害関係が伴い、今日なお難しい問題が残されている。ただし、九大蔵古活字版源氏に関しては、その後、九州大学附属図書館研究開発室の事業として、鮮明なカラー画像のデータベースを作製し、附属図書館のホームページ上で公開するとともに、図書館長（現副学長兼図書館長）で我が国情報学の第一人者有川節夫教授の英断によって廉価なCD-ROM版としても市販することができたのは、九州大学にとっては怪我の功名というべきであった。

資料館制作の画像を伴う「データベース古典コレクション」が、その後も着々と進行しているのは、まことによろこばしい。過日公表された科学技術・学術審議会 学術分科会の報告書「人文・社会科学の振興について」中にも、文献学や文字学における「データベースの整備と流通促進」が謳われているが、資料館制作のデータベースは資料の翻字や標準化本文や本文注記までを備えた別格の仕様で、たんなる図書館ではなく、研究機能を備えた国文学研究資料館ならではの内容の重厚さを誇るといえる。一層の発展を期待したい。

創立三十周年、ブラウオー！

東京大学大学院総合文化研究科助教授

ロバート・キャンベル

九州に住んでいたころは地方の利用者として折々来館しては調べ物をして、共同研究や講演会があったときも参加した。だがどちらかといえば自分の勉強より九州地区の調査員として、大分・佐賀・長崎あたりを年々夏から秋にかけて歩き回り、文庫整理と書誌カード取りに多くの時間を費やしたように憶えている。宿題にはそれなりの負担もあったが、めったに行けない小さな城下町で数知れずの本と人に出会えたことは、今では大切な財産だ。いよいよ教官としてスタッフに加わったのは平成七年、逆算すると地方にいて十年近くお世話になった。整理閲覧部から文献資料部へ持ち場をシフトしつつ、五年間で何とかつとめ上げ、一昨年に都内から通う一般利用者に舞い戻った。学生たちに調べ方の指導をすることが多く、何かというと資料館へ見に行つて来いということになるのだから、今なお縁が切れない。切れるどころか、重度の依存症になっている。

国文研は十年、二十年と時を重ねていくうちに着実に収集資料の懐を深め、研究情報の網の目を細かに公開の度も高め、われわれを引きつけてきた。個々の研究者の仕事にくっきりとした形で貢献しているばかりでなく、この国文学界全体の姿を左右するほどの働きをしているのが、ここ十年來の実体であり、それこそ今後も財産を殖やしてゆく階梯だと言えよう。コンピューターと文学研究の相性の探求、出版文化をめぐる近代への転換の実証、在外日本資料の発掘と利用に向けた実践的調査研究。筆者が関心をよせる領域だけでも、これぐらいの仕事がすぐ思いつく。

しかし一方では、このわずか十年間の状況と比べてみると、鮮やかな成果をもたらしてきた継続的な調査研究が今後も相変わらず進められ、のびのびと大輪の花を咲かせ続けることは、残念ながら、けっして約束された事実ではあるまい。いま「文学」そのものが立っている危うい地点に目をつぶったとしても、とくに大学改編の後、独立行政法人化のさなかにあつては、基礎研究全般に対する大学内外の目は冷徹そのものである。地道な継続だけが成功にむすびつく国文研の存在の根柢を、これからの十年間、以前には考えられないほどことあるごとに示して行かなければならぬだろう。

資料館の本来の仕事は、近代以降のいわゆる狭義の「文学」ではなく、むしろ歴史、倫理学、芸能、美術などを包括する、世界的にみてもすぐれて「超域的」文化の科学である。筆者が現在いる場所には、「国」の文学だから日本文学に価値を無条件に見出そうというムードは、もはやない。勿体ないことだと心では思っているけれど、実際そうだから仕方がない。明治をふくんだ日本の古典文芸ほど多面性とみ、「文化研究」を形成し得る材料を手許に持ちながらも、われわれはその材料を、「他者」と分かち合うために、十分に努力してきたのだろうか。「他者」とは、日本文学に関心を寄せる他国籍者ももちろん入るが、むしろより広く、他分野の研究者・学生・一般人のこと

を筆者は想像する。アジアの歴史文化が見わたせる一本の大舞台を国文研はすでに組み立てているはずだから、その姿が、克明に識別できるように展開すべきだろう。継続的な基礎学の力と想像性が問われる現代、国文研の存続こそ大きな試金石であり、われわれの、それを支える覚悟が問われるときでもあろう。

最後に、一利用者としてのぞむところを、問われもしないままアンケート風に書き出してみよう。ひとつでも実現してほしい。

- ① オンライン・サービスをさらに強化すべし。とくに新刊雑誌の目次を受け入れ順に即時ウェブ上に公開すること、著作権をクリアしたものから、日本文学研究のオンラインテキスト・データベースを構築、公開すること。
- ② カード決済で文献複写などが注文できるようにすべし。海外における知名度を高める必須条件である。
- ③ 古典をふくむ文献調査と収集の電子化を進め、館蔵原本と、許可が得られたものからマイクロ資料の電子化の公開を執行すべし。

国文学研究資料館と史料館

—佐竹館長時代の思い出—

中央大学文学部教授 森 安彦

佐竹昭廣先生が小山弘志先生の後任として国文学研究資料館長として着任されたのは、平成5年(1993)4月1日であった。

丁度この日はポーランドの日本文学研究者のメラノビッチ氏が国文学研究資料館(以下、国文研)の外国人研究員としての任期を終了し、離館する日であった。玄関ホールで見送る催しがあり、花束贈呈などがあり、佐竹新館長の送る言葉があった。佐竹先生は、挨拶の最後に「あばよ」という言葉を贈りますといい、「あばよ」というのは「あわばや」という日本の古語が語源で、「またお会いしたいですね」ということだと注釈された。子供の頃遊び仲間と別れるとき「あばよ」と手を振っていた頃を思い出し、その意味を知り、どこかユーモアがあり、楽しい気分になったのが佐竹先生の最初の印象であった。

佐竹先生は矢継ぎ早に、これまでの事業や組織のあり方を改革し、新しい企画を次々と生み出し、館内に新鮮さと躍動感をもたらした。以下、史料館と国文研との関りを中心に二、三の事実を紹介してみよう。

まず史料館にとって画期的なことになったのは、佐竹先生は着任すると、すぐに11年間不在であった史料館長職を復活させたことであった。史料館では、榎本宗次史料館長が急逝して以来、行政管理庁の行政勧告(国立歴史民俗博物館との統合の示唆)などがあり、史料館長は未補充のまま国文研館長が史料館長事務取扱を兼務してきたのであった。

この状況を解消し、史料館長の設置を文部省と折衝し、実現させたのであった。当時史料館で一番年長であった私が同年8月1日付で史料館長に任命されたのであった。この時、佐竹先生は、「木曾殿と背中合わせの寒さかな」という句を引かれて、これからは国文研と史料館がお互いに正面から向き合って協力して行うという趣旨のことを述べられたことが忘れられない。

この年の8月下旬の五日間、佐竹先生の新企画「夏期原典講読セミナー」が開催され、関東地区から集まった大学院生10名を対象に国文研の三部長(文献資料部長・整理閲覧部長・研究情報部長)と史料館長の四人が講師となり、各三回ずつ講義を担当した。この時の各自の講義録が「セミナー原典を読む」シリーズとして、平凡社から出版された。私の『古文書が語る近世村人の一生』はすでに六刷を重ね私も現在、大学での授業のテキストに使用している。

さて、平成8年(1996)度の国文研春期特別展示と公開講演を史料館が中心となって開催するように佐竹館長から懇請された。これは佐竹先生が史料館に一つのチャンスを与えてくれたのであった。史料館としては、館員の総力を結集してこれに取り組んだ。「近世文字社会のひろがり—史料

館収蔵史料展一」をテーマに5月13日から24日まで、参観者は約900人に及んだ。また5月17日の公開講演では、講師としては、史料館から私が「近世私文書の世界」、高木俊輔教授が「近世の農民日記」、それに国立歴史民俗博物館の高橋敏教授が「近世村落文化の構造」と題して実施し、これも会場が溢れるほどの盛況であった。

佐竹先生は、実に数々の業績を遺して、平成9年(1997)3月末日に館内外から惜しまれつつ一期4年の任期を全うし、退職されたのであった。佐竹館長時代に史料館は大きく飛躍したといえよう。佐竹先生は史料館を対等なパートナーとして遇してくれたのであった。

佐竹先生の退職直前の3月に作成された国文研の「外部評価委員会報告書」には、史料館の将来の独立についても言及している。

私も佐竹先生退職1年後に史料館を定年退職した。現在史料館の置かれている立場はまことに陰しいが、今の日本に50年余の蓄積をもつ史料館に代替できる機関は存在しないのである。

<記録史料の科学>を拓く

駿河台大学文化情報学部助教授 保坂 裕興

歴史学と史料学はどのような関係にあるのだろうか。史料学が歴史学の研究手続きであるだけならば、ことさら史料学を言い立てることはあるのだろうか。一九七二年より国文学研究資料館のうちに歩んだ史料館は、記録史料＝アーカイブズの形成論、保存管理論、そして情報資源化論等々を従来の史料学に付け加えて、いわば<記録史料の科学>の全体を構築し、その自立への道を拓いてきた。ここに三〇周年を迎えられた国文学研究資料館の幾多の尽力にたいし、その恩恵にあずかった者として感謝を申し上げるとともに、この史料館の営みを私なりにどのように受け止めたのか、一端を述べてみたいと思う。

一九八〇年代を歴史学生としてすごした私は、その中頃に史料館の諸兄が唱える史料保存の考え方に会った。それは出所原則、原秩序尊重の原則などをはじめとするいくつかの原理・原則であり、そのどれもが新しい史料保存を象徴していた。はじめはある種の規範としか映らなかったが、間もなく、史料取り扱い平等の原則と呼ばれていたものに強い共感を覚えるようになった。

当時、私は近世社会において特異な宗教者と考えられていた虚無僧を素材として、近世日本史を研究していた。これに関する歴史資料は、ふつうならばその担当役所である江戸幕府寺社奉行所、共同組織の頂点たる虚無僧寺院の本山、そして虚無僧が活動拠点とした寺院に残されているはずである。ところが、それを知ることのできる寺社奉行文書はごくわずかであり、また寺院文書も彼らの宗派である普化宗が明治初頭に廃止された際に、ほとんどが焼却処分されていた。史料の探索は農村文書にも及んだ。一八世紀中頃以降、虚無僧寺院は虚無僧が強引にお布施をねだり取ることにないように、あらかじめ村から一定の仕切金を受け取り、その代わりに虚無僧が村内に立ち入ることを禁止する慣行を行っていた。この虚無僧留場制度を跡づける史料は、契約証文と仕切金の領収書、そして村や寺院の事情をつづった手紙類である。しかしこれらの史料も、研究上の意義が不明確なためか、あるいは領収書などの数が多いためか、史料目録には「〇〇寺関係一括」などと記述されるのみであり、現地に足を運んで内容を確認しなければならなかったのである。

虚無僧の史料も他の史料と同様に重要だ、なぜきちんと目録に情報を載せないのか、史料取り扱い平等の原則に反するではないか、といった具合にこの原則を受けとめ用いた。史料保存に際してある時代の歴史学の関心が優先されれば、そこから漏れる史料が発生し、歴史解明の手からも、史料保存の手からも抜け落ちることになるのは確かである。

一九八六年夏、富士山麓での史料調査合宿の夜、このような話を材料にある史料館教官と議論したことがあった。氏の議論はいつも具体的であり、反面きまった答えを教えるふうでもなかったが、夜が白みはじめる頃には次のように考えるようになっていた。取り扱い平等と言いながらも、自分

は虚無僧関係の史料さえ目録に詳しく載っていれば満足したのではないか、それは歴史を研究する側からの要求にすぎないのではないか。史料館の先達たちが唱える原則や理論は、歴史学から自立して、いわば史料のプロバイダーの側に立ち、未来までも想定して史料の活用を科学的に担保するものなのだ、と。

この歴史学と史料学の境界を頭の中で理解することは、むしろたやすいことであろう。だが現実には、この境界はしばしばあいまいなまま放置される。私もこの境界を、三途の川を渡るような気分で眺めたこともなくはない。しかし、この境界を明確なものとし、両者を車輪の両輪のごとくカラカラと響き渡らせることによって、多くの市民が歴史資料を存分に用い、歴史を学び、それに基づいて新しい文化社会の構築に向けた提案がなされる社会を実現するのではなかったか。私は、史料館が拓いてきた<記録史料の科学>をこのようなものとして受け止め、それが未来社会にとって必要欠くべからざるものであることを信じている。